

白いくま

小川未明

青空文庫

そこは、熱い国でありました。日の光が強く、青々としている木立や、丘の上を照らしていました。

この国の動物園には、熱帯地方に産するいろいろな動物が、他の国の動物園には、とうてい見られないほどたくさんありましたが、寒い国にすんでいる動物は、なかなかよく育たないものとみえて、あまり、数多くはありません。その中に、一匹きの白いくまが、みんなから珍しがられ、またかわいがられていました。

なにしろ、木立の柔らかな葉が、きらきらと光って、いつかはあめのように溶けてしまいうそうにみえるほどの熱いところでありましたから、寒い、寒い、氷山の上ですんでいるしらくまを飼っておくことは、まったく容易ではなかったのです。

大きな水たまりを造って、その中へ、氷のかけらを投げいれておきます。くまは、熱さにこらえられないので、幾度となく、その水の中に浸ります。そして、バシャバシャと水をはねかえして、冷たい氷水を浴びたときだけ、わずかに、自分の生まれた北の故郷にいた時分のことを思い出したり、また、ちよつと、その当時の気持ちになったのであります。

あちらには、どんよりとして、いつも眠っているような海が見えました。その海は、おしで、盲目なのだった。なぜなら、ものすごい叫びをあげている波は、みんな口を縫われ
てしまつて、魚のうろこのように、海はすっかり凍つていたからであります。そして、氷
山が、気味悪く光つて、魔物の牙のように鋭く、ところどころに、灰色の空をかも
うとしていたからです。

脂肪のたくさんな、むくむくと毛の厚いしろくまはそこを平気で歩いていました。また、
氷が解ける時分になれば、険しい山の方へのこのこと帰つてゆきました。広い寂しい天地
の間を自由にふるまうことができたのでした。

それが、いまどうでしょう。熱い、熱い、知らない国に連れてこられて、狭い鉄のおり
の中へいれられてしまつたのです。はじめのうちは、腹だたいいやら、残念やらで、じ
つとしていることができませんでした。かんしゃくまぎれに鉄の棒を折り曲げて、外へ暴
れ出してやろうと、何度となく、そのおりの鉄棒に飛びついたかきれません。

力の強いくまは、いままで、こんなに、体の中にあつた力をすっかり出したことはな
かつたのです。なぜなら、その必要がなかつたのでした。いま、いくら力を出しても、す
べてが無効であることを知ったときに、くまは、はじめて人間が、自分より智慧のある

動物だということをも知ったのでした。

「これは、もう、力づくでいつてはだめだ。」と、くまは考えました。

彼は、しばらく、人間がなにをしようと、するままに黙って、見ていようと思いましたが。くまは、人間は、けつして、これ以上なんにもしないということを知ったのであります。

毎日、白い布を頭にかぶった、青い色の服を着た男が、生肉の切れを持ってきてくれました。くまは、それを食べながら、「なんといますい肉だろう。」と、考えたのです。ぴちぴちはねている生き物を自分の手でしっかり押さえつけて、頭がらガリガリとかじるのにくらべては、歯ごたえがなかった。彼は、もう一度氷山の上で、逃げてゆくとする動物を追いかけていって、それをつかまえて、食べてみたいと思いました。

食べ物、まあ、これでもしかたがないが、暑いには、こまっしてしまいました。しろ布をかぶった男が、大きな氷の塊を水の中へ投げ込んでゆきました。くまは、ザブリと躍り込んで浸りました。浸ったかと思うと、また躍り上がりました。ちよつと、その瞬間だけいい気持ちでした。

「人間は、なんていうけちな奴だ。あの海はすっかり凍っているじゃないか？ また氷

山やまの氷こおりをいくらでも持つてくればいいじゃないか。それなのに、これんばかりしか、氷こおりをここへは持つてこない。こんなけちんぼうで、そのうえ、力ちからの弱よわいくせに、よくあんな強い棒ぼうを造つくつたものだ。いや、あのときは俺おれがどうかしていたのだろう。この力ちからで、あんな細ほそいものがへし折おれないはずはないのだ……。」

白しろいくまは、ふいに、そんなことが頭あたまに浮うかぶと、どつと暴風あらしのように、鉄てつの格子こうしに飛びついて破やぶろうとしました。しかし、やつぱりだめでした。

けれど、このすばらしい勢いきおいで、見物人けんぶつにんがみんなびつくりして、声こえをたてました。くまはそれをせめても痛快つうかいがったのであります。

そんなようなことも、このくまが、ここにきたはじめのうちのことでした。しまいには、このおりの中なかにも、人間にんげんにも馴なれてしまいました。人間にんげんは思おもつたよりはやさしかったからです。

この国くにの人々ひとびとは、寒さむい、寒さむい、北きたの国くににすんでいる白しろいくまをひじょうに珍めずしがりました。いったこともない、想おもつても、ほとんど想像そうぞうされない北ほっきよく極ちかに近い世界せかいを考えかんがえることは、なんとなく神秘しんぴ的てきであり、また、うつとりとさせられるからでした。

「くまや、おまえは、そんな遠とほい、寒さむい国くにで生うまれたのかい。親おやもあり、兄きょうだい弟だいもあつ

たのだろう。どうして、人間などに捕らえられて、こんなところへきたのか？」と、見物の中にはこんなことをいった学校の生徒もありました。

月日はたつて、はじめは、子ぐまであったのが、だんだん年を取りました。その間に、白いくまは、芸というほどのことでもないが、見物に向かつて、頭を下げたり、体を左右に揺すってみせるようなことを覚ええました。体を左右に揺するのは、うれしい感じを表すことであり、頭を上下に動かすのは、なにか食べるものを欲しいという心を示すものだということ、見物にもわかったのであります。

「くまが、あんなに、頭を下げているから、チヨコレートをやりましょう。」とあって、見物していた女の人は、日がさをかけてオペラバッグを開きながらいました。

この国は、ココアや、コーヒーの産地でありましたから、チヨコレートのおいしいのが、またたくさんありました。くまは、チヨコレートが大好きでした。

動物園の白いくまが、チヨコレートが大好きだということが、みんなに知れわたりましたから、見物にくる女の人や、子供たちが、くまにチヨコレートを持ってきてやりましたので、あんまり食べ過ぎて、くまは夜も眠れなかつたことがあります。

しかし、くまも、いつしかすつかり、この国の生活に慣れてしまいました。そして、

いまではあまり生まれ国のことなどを思い出さなくなつたようです。境遇というものは、しぜんはその性質までも変えてしまふのでした。

子供の時分に、この熱い国の動物園に連れられてきた白いくまは、もう年をとつてしまいました。

ある日のこと、やしの樹の木蔭で、青い着物をきて、白い布を頭に巻いた係の男が、大きなパイプで、いい香気のするたばこをすばすばと吸つて、石に腰をかけて、考え顔をしていました。

そこへ、一人の紳士が、令嬢をつれて通りかかりました。この紳士は日ごろから、この動物園の男を知っているとみえまして、につこりと笑つて、顔を見合わせると、「このごろ、しろくまはおとなしくなりましたね。」といました。

パイプをくわえていた男は、青い煙を吹きながら、

「いまも、しろくまのことを、私は、考えていたのです。このごろは、あんまり水の中へも、たくさんは飛び込まないし、暴れまわつたということもありません。まったくおとなしくなりましたよ。それは、まことにけつこうなことなんですが、困りましたのは、あんまりチョコレートを食べたもので、歯がすっかり、もうだめになつてしまつたんです。」

と、男は、答えたのです。

紳士と令嬢は、思わず笑いました。

「じゃ、人間にかみつく心配がなくていいじゃないか？」と、紳士はいいました。

パイプをくわえた男も、からからと笑いました。

「まったく、そうです。あんな鉄格子のおりに入れておく必要はありませんね。」と
いいました。

チョコレートを食べたために、歯がなくなってしまうたしろくまの話が新聞に出ると、
いままでよりいつそうこの無邪気なくまの人氣が募ったのであります。毎日動物園へ
見物人が押し寄せてまいりました。白いくまは、いままでよりか、もつとにぎやかにな
つたのを喜びました。そして、みんなの方を向いて、頭を上下に振ったり、体を左右に揺
すつたりしました。「チョコレートをやってはなりません」と、札が立てられたにかかわ
らず、あいかかわらずオペラバッグから、女たちはチョコレートを出して、投げてやりまし
た。

歯のなくなつたくまを、いつまでもおりの中へ入れておく必要がないという説も出ま
した。動物園では、立て札に書いてあるような、猛獣の性質がなくなつてしま

と、この白いくまの処分に困りました。このことを、あるりこうな香具師が聞き込みました。彼は、あまり金を出さないで、白いくまを手にいれたのであります。

香具師は、白いくまを長く、その内にいれてあつたおりからつれ出して、動物園を去りました。足のつめは切り、危ないような歯はみんな取つてしまつて、白いくまを自由にさせてやりました。くまは、これを苦痛と思うどころでなく、広々とした世界へ出られたのを喜びました。もう、このごろは、生まれた国の夢も見ることがなければ、氷の上を駆けて遊んだ子供の時分のことまで忘れてしまつて、オペラバッグを見るとチョコレートも投げてくれないかと、目を細くしているのであります。

香具師は、白いくまに、紅い日がさを差して踊ることなどを教え込みました。白いくまは、物覚えのいいほうではなかつたけれど、後足で立ち上がることや、ダンスのまねなどをするようになりました。

この南の国の熱い午後のこと、町のはずれの広場でいろいろと手品や、唄や、踊りなどをしてみせている興行物がありました。その中には、この白いくまのダンスも混じつていました。くろんぼが笛や、らっぱを吹き、鉦などをたたくと、白いくまが、赤と緑のまじった布を腹に巻いて紅い日がさを差しながらダンスをはじめたのです。このとき、み

んなは、手をたたいてはやしました。

「あれが、チョコレートで歯をなくしてしまった、動物園にいたしろくまだよ。」と、子供たちはいいました。

香具師は、広場に、響きわたるような声で、

「これは、北極の方に生まれたしろくまです。かわいそうに、こんなに遠いところへきていますが、また、みなさまにひどくかわいがられてしあわせ者です。動物園から出されたとき、生まれた国へ帰してやろうと思いましたが、くまのいうのに、こんなに年を取って、歯がなくなつて、国へ帰るより、やはりみなさまにかわいがられて、チョコレートをもらつて食べているほうがいいのです。……どうぞ芸は、未熟ですが、遠いところからきていると思つてかわいがつてやってください。」といいました。

この熱い国から、世界のいたるところへ、はるばる輸出されるココアの罐や、チョコレートートのブリキ製の箱の上に、くまが日がさをさして、やしの木のある野原で踊っている絵があります。

北極の方近くまでそれはゆくであろうが、これは、このしろくまを描いたものです。

☆
香具師やし——縁日えんにちや祭りまつなどで、
見せ物ものなどを興業こうぎょうする人ひとや、
品物しなものを売うる人ひと。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月20日発行

初出：「良友」

1926（大正15）年10～11月

※表題は底本では、「白《しろ》いくま」となっています。

※初出時の表題は「白い熊」です。

※本文末の注記の「一〇八ページ」は省略しました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年10月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白いくま

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>